

## 〔病害虫発生概況〕

## 〔病 害〕

昭和52年は1月上旬から2月中旬に異常寒波に見舞われ、カンキツなどで樹勢衰弱がおこり黒点病多発の誘因となった。3月後半から5月にかけては高温多雨となり、これは麦類赤かび病の発生に連っていった。7月中旬の梅雨明けとともに高温多照で経過し、台風7号および9号の接近もあったが影響は少なかった。そのため、いもち病、白葉枯病の発生は少なく経過した。10月以降の高温（暖秋）はトマトなどの青枯病、ダイコン軟腐病発生誘因となった。

## 稲・麦病害

早期水稲では葉いもちが多発した（長崎・宮崎・鹿児島）。普通期水稲のいもちも、福岡で例年になく山間部に多発田が多く、長崎・大分でも葉いもちが多発した。しかし、7月以降の高温多照と防除の徹底もあって、穂いもちも各地とも少発生に経過した。白葉枯病に対する8月下旬の台風7号および9月上旬の台風9号の影響は少なく、台風7号の豪雨がかった五島で局地的な多発が見られた程度で、全般的に少発生で終わった。紋枯病は福岡・佐賀で少発生であったが、高温の影響を受けて長崎・熊本・大分では増加傾向にあり、宮崎・鹿児島で出穂期以降に多発生となった。ごま葉枯病は福岡・佐賀・宮崎・鹿児島などで出穂期以降に多発し、穂枯れも増加した。もみ枯細菌病も高温の影響を受けて広く発生し、長崎・鹿児島では特に早生種に多発した。沖縄では散発的ではあるが、本病の発生が確認された。萎縮病は箱施葉の普及など防除の徹底で、並発生にとどまった。九州本土でわい化病の発生はなく、沖縄で transitory yellowing の発生が確認された。縞葉枯病は大分・鹿児島などで少発生ながら目立ってきているので、麦作の振興と関連して注意が必要であろう。その他、心枯線虫病の発生面積の拡大（長崎）、葉網斑病の発生（熊本）、穂の褐変症（鹿児島）が問題になった。

麦類赤かび病は佐賀（3年連続）・長崎・大分・鹿児島などで多発した。出穂～登熟前半の4月が全般に高温多雨であったため、出穂期の早いものほど発生被害が著しかった。晩播になると、被害はかなり軽減した。北部九州の黒節病は少発生であった。コムギ黄さび病は、長崎では5年ぶりに極少ながら発生した。佐賀ではやや多発生となり、4月19～21日の黄砂が原因とみられている。

## 野菜病害

施設栽培でキュウリ灰色かび病、ウリ類のべと病、うどんこ病、疫病が各地に多発した。スイカ・メロンに菌核病（熊本）、スイカ・キュウリでつる枯病（宮崎・鹿児島）の発生が増加した。佐賀では促成栽培キュウリに斑点細菌病が多発した。カボチャ台キュウリおよびメロンの急性萎ちょう症が多発し（福岡・大分）、イチゴ根腐萎ちょう症が連作ほ場を中心に増加した。施設野菜の灰色かび病殺菌剤（チオファネートメチル剤、ベノミル剤）に対する耐性菌の出現が、前年に続いて多かった。トマト疫病（福岡・長崎）、萎ちょう病（レース J<sub>3</sub>）（熊本）および馬鈴しょの疫病、青枯病が多発し、そうか病も広く発生した（長崎）。佐賀の夏秋ナスおよびトマトの青枯病の発生、ダイコン軟腐病の多発（宮崎・鹿児島）も暖秋の影響と認められる。鹿児島ではエンドウに褐紋、褐斑病およびうどんこ病が多発した。タマネギ春腐病が多発し（長崎）、カンラン萎黄病（大分・福岡）の発生が拡がり、*Pseudomonas* 属菌によるレタスの腐敗症が前年に続いて多発した。福岡にナス半身萎ちょう病が発生した。トマト、キュウリ、ショウガ、ダイコン、ハクサイなどのモザイク病（CMV）の発生が各地で増加傾向にみられた。サツマイモ表巻症状の発生が熊本・宮崎・鹿児島で確認された。

## 果樹・茶病害

1、2月の異常寒波による樹勢衰弱が影響して、カンキツの黒点病が全般的に多発した。かいよう病は、前年秋の台風の影響を受けて佐賀・熊本・鹿児島で多発した。そうか病は5月の強風雨のため宮崎・鹿児島で早期に発生したが、少発生でとどまった。熊本では8～10月の高温多照のため早生温州に日焼け炭そ病が、大分ではカボス白斑病がそれぞれ多発した。ブドウ黒とう病は3～5月が高温多雨に推移したため発生は多かったが、防除の徹底で被害は少なかった（熊本）。べと病は早期から多発した（福岡）。ナシ黒星病は耐性菌の出現で被害が多く（佐賀・大分）、赤星病は少発生であった（熊本・大分）。無袋ナシで尻ぐされ症が発生した（福岡）。

茶もち病が長崎で、宮崎では沿海部および高台部の二番茶期に網もち病が広く発生した。鹿児島ではもち病が一、二番茶期に、網もち病は秋季より多発し、茶の品質低下が憂慮される。

## 特用作物病害

サトウキビモザイク病の発生が沖縄で初めて確認さ



かったが、農薬に対する感受性が低下し、防除が不十分なことも起因している。

一般的にコガネムシ類、ネキリムシ類、ハムシ類など土壌害虫が、特に秋に多かった。これも秋期の異常気象が原因している。そのほか、局部的に多発したのは、ハスモンヨトウがカンショ、サトイモ、葉菜類に（熊本・宮崎・沖縄）、ネギコガが葉ネギに（大分）、ウラナリシジミとハモグリバエがエンドウに（鹿児島）、ナカジロシタバがカンショに（鹿児島・沖縄）、アザミウマがネギに（長崎・大分）に多発した。

侵入害虫のオンシツコナジラミは、本年新に宮崎県（3月）、佐賀県（6月）、熊本県（7月）に相次いで侵入し、発生が確認され、また福岡県（6月）でも再発した。九州では50年3月福岡県（久留米市）で最初に確認されて以来、未発生県は鹿児島県だけとなった。なお、現在では鹿児島県を除く全国で発生が確認されている。

サトウキビでは、沖縄県で昨年についてアオドウガネが多発した。近年発生面積が拡大し、被害も多種作物に及んでいる。局部的にはカンシャクシコメツキ、タカマルカイガラムシが異常多発した。

## 果 樹 ・ 茶

各地方を通じ全般的に発生が多かったのは、ミカン類ではミカンハダニ、ミカンサビダニ、チャノキイロアザミウマ、ゴマダラカミキリ、ヤノネカイガラムシ（第1・2世代）、ミカントゲコナジラミであった。ハダニやカイガラムシは冬期の異常寒波による樹の寒害のため、マシン油乳剤の散布ができなかったところが多く、また秋期の異常高温と少雨が多発原因と考えられる。

そのほか、ナシではハダニ、チャバネアオカメムシ、カキやクリではキクイムシ、カミキリムシ、クリタマバチなどが多かった。最近多発し、クリの枯死まで発生しているカツラマルカイガラムシは、福岡県では昨年比に比べて多目であったが、大分県では本年は激減し、対照的であった。カミキリムシやキクイムシは近年多発傾向で、放任園が発生源となっている。

茶ではカンザワハダニが春秋に多発し、そのほかチャノミドリヒメヨコバイ、クワシロカイガラムシ、チャノキイロアザミウマが全般的に多かった。

（九州農業試験場 環境第1部）